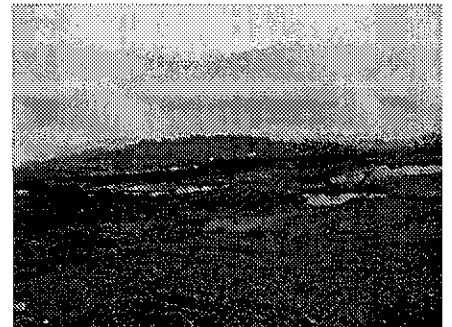


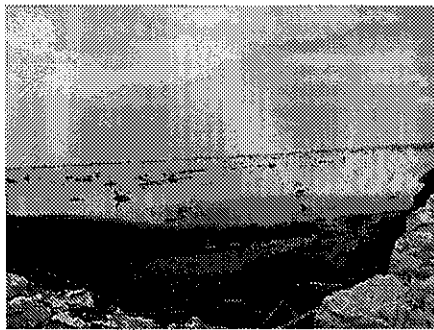
コンテナが途中から破損



沿岸近くの寸断された道路



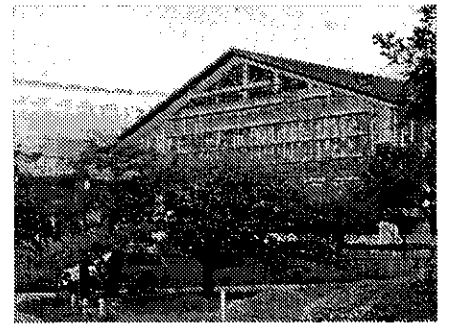
沿岸近くの様子



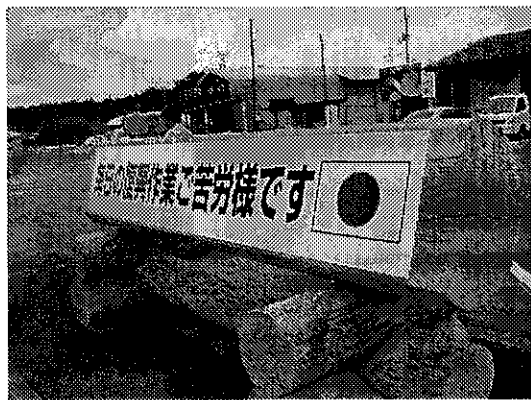
県立自然公園松川浦



大洲海岸から流れ着いた松の瓦礫



体育館の側壁が
落ちている



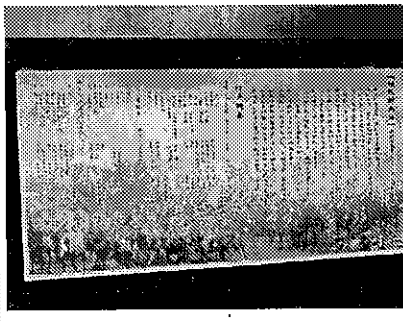
福島原発、立ち入り制限区域前のドライブインの
駐車場にあった看板



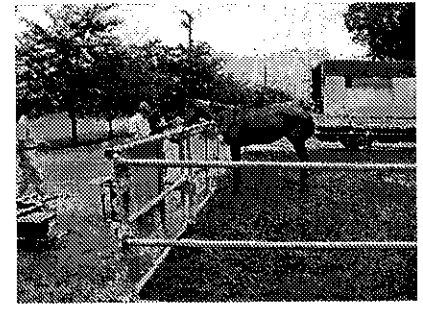
福島原発、立ち入り制限区域前の国道
6号線の検問所



相馬といえば「相馬野馬追」
今年も行なわれた馬場



「相馬野馬追」の行事概要看板



中村神社前にいた被災馬
サンライズが野馬追に参加
(川島麻沙美氏調教)

写真だけでも被災地の様子がわかります。未曾有の困難を乗り越えるため、多くの人々が前を向いて歩み続けています。

市の概要について

福島県相馬市は、人口37,113人。世帯数13,623（平成23年7月1日現在）面積197,67平方キロメートル、東は太平洋に面し、西は伊達市、南は飯舘村と南相馬市、北は新地町と宮城県に隣接する400年らしいの城下町である。概ね平坦地と山間部とが相折半し、市街地は中央の平坦地に位置する。谷の奥まで水田がいて、全体的には米どころで農業のほとんどが水田である。淡水と海水が混ざった汽水領域の松川浦では、干潟でノリの養殖やアサリをやっている。福島県の漁業生産高の160億円うち、その半分は沿岸漁業と半分は遠洋漁業であるが、沿岸漁業の80億の内50億は相馬漁港で水揚げしている。現在重要港湾相馬港を開発拠点として、その背後に相馬中核工業団地を造成し優良企業の立地促進を図っているところである。（震災後は大きく変化しています）

調査研究活動1

震災後、NPO団体みなさんの動きと支援等などについて意見交換

NPO法人・馬とあゆむSOMA（活動拠点 相馬中村神社）

意見交換者・相馬家33代当主・相馬和胤氏の長男 相馬行胤氏

相馬中村神社 禰宜 川島麻沙美氏

相馬行胤氏・震災直後、まず考えたのは食べ物、水が無いどうするか、どことも連絡が取れない状況で、行政が動く前に民間レベルで集められるものをフェイスブックで呼びかけ、期限付きで集め（携帯は不通でも、メールはOKだった）一週間で5、60tの物資が集まった。民間のやった初動としては類のないものだった。その後、「ボランティアの受け入れ、全国からの物資の受け入れや、さばける能力を誰に求めるのかを考えたとき、ここNPOの立ち位置を考え、受け入れた」。行政トップの市長もぶれずに協力してくださり、牽引してくれたことはすごかった。全国からの救援物資の保管場所やボランティアの拠点を相馬中村神社に置き、初めて会った友達の友達である寝食を共にした仲間、SOSライフセーバーのみなさんの助けをかり、99パーセントは捌けた。行政は100集まるまで10集まっても配らないが、我々は10でも集まれば少量でも配る。ここに大きな差がある。早い段階で浜田市を初め多くの自治体が救援物資を送ってくれたこと、100日に亘って毎日パンを1,800個作ってくれた広島のパン屋さん、多くの人たちが協力しかわってくれた事に感謝しますとのことでした。何ができるか、自分達の立ち位置を考えスピードある行動力は、旧相馬藩の有事に備える気風がでていると思った。

川島麻沙美氏・馬をはじめ動物達の対応をもっと早くしたかった。今も続いているストレスがある。同じように子ども達も不安やストレスがある。心のケアが大事になってくる。

相馬行胤氏・有事がある時は強きリーダーシップ必要、どんなときでも守ってくれる人を選ぶことができるのは、選挙であり有権者の人たちである。今、一度選挙の大事さを考えるべきだとも言われた。今後の支援は、それが何であれ忘れないで継続した支援をしていくことが大事であり、同士の結束力をたかめるタウンミーティング等が必要である。

（NPOの活動を相馬行胤氏より伺う、中央）

（相馬中村神社社務所前、女性は川島麻沙美氏）



調査研究活動 2

災害復旧の状況と今後の支援の在り方について

相馬市長・立谷秀清氏より相馬を語るなら400年の城下町である歴史から（伊達藩VS相馬藩）を伺い、相馬野馬追が伊達に備える軍事訓練であり、一極集中の背水の陣であることがわかった。歴史が物語るように、有事（震災等）に備えて構えているため、この気風はDNAとして伝わっており、今回の震災でも市民は凄然としていたと聞いた。

私たち浜田市民も石見人としての気風をもっているが、同じようにできるだろうか？

震災の罹災者は約5,000人であり犠牲者は450人、9割は助かった。映像で観る限り、死亡した人たちは津波で溺れ、溺死が多いだろうと思っていたが、ほとんどの人たちが津波の衝撃、水圧によって圧迫死されたことを聞き、驚きと恐ろしさを感じました。軽傷で助かるか、死ぬかのどちらかであり、重傷者はあまりいないと聞き、さらに驚き、その差はなんだろうと考えても答えはみつきりません。

震災直後の災害対策の基本は「次の死者を出さない」生存者救出、そして人間生きるためには、まず水が必要であり次が食料である。そして避難者の状況把握における住民基本台帳との突合で市長がつくづく思ったことは、「地方自治の原点は戸籍の番人である」。

相馬市の地域再生に向けて最初に考えなければいけないことは、震災直後から48時間位で決まっていた。（直後の対応、担当課の割り当て、地域再生の取り組み等）

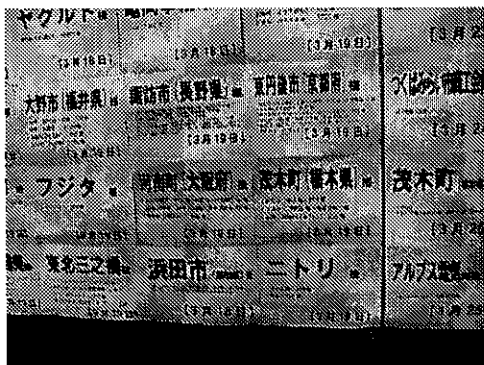
救援物資は他の自治体から続々届いたが、友人の市長たちがいち早く送ってくれた。日頃の付き合いがいかに大事である改めてわかった。いまだに仮設住宅等で暮らす避難者4,000人に対して今後私たちができる支援はとお聞きしたら、市長は例としてお米や浜田の特産一夜干しなどが喜ばれるのではないかと提案された。そのことをふまえ、今後の支援を考えていきたい。

相馬市長が被害状況や災害対策などをわかり易く、時には力強く私たちに説明をされる姿は行政のトップたる堂々としたものだった。NPOの相馬行胤氏が言われていた通り、有事ある時は行政の強きリーダーシップが必要で、まさしく相馬市長であると感じた。

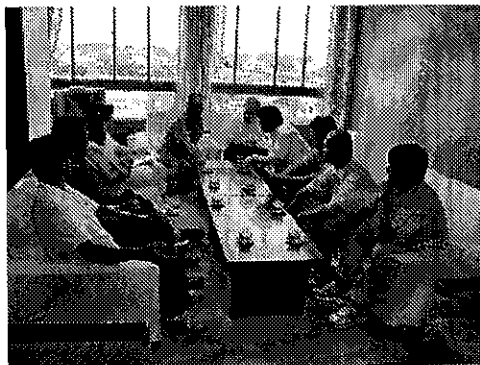
説明をされる中、私たちにいつどこで有事がおきても不思議ではないから、震災を教訓として自分達の立ち位置を考え、瞬時に行動に移すことができるように、日頃の心構えや、備えがいかに大事かを教わりました。

復旧・復興の忙しい中、私たちの行政視察を快く受け入れていただいた、宿泊した岬荘のおかみさん、NPOの相馬行胤氏、川島麻沙美氏そして波多野広文市議会議員、立谷秀清市長には大変お世話になりました。

(浜田市救援物資の告知)



(波多野議長と)



(立谷市長と)

